

日本音楽学会

東日本支部通信 第78号

MSJ East Japan Chapter Newsletter No.78

第78回 定例研究会報告

日時：2022年12月17日(土) 14:00~17:00

場所：東京大学駒場キャンパス KOMCEE east K214

内容：シンポジウム

ヨハン・マッテゾンの音楽思想—その可能性と限界

コーディネーター(司会)：上尾 信也(東日本支部)

シンポジウム趣旨説明：岡野 宏(東日本支部)

研究発表：

1. マッテゾンに連なる思想的系譜
村上 曜(東日本支部)
2. マッテゾンの「感覚主義」について
米良 ゆき(西日本支部)
3. マッテゾンの修辭的音楽観とその可能性
岡野 宏(東日本支部)

コメンテーター：小穴 晶子(東日本支部)

【開催趣旨】

本シンポジウムの目的はマッテゾン研究を狭義の音楽理論史ないし作曲理論史の文脈から解放し、より広い思想史的文脈の中に位置付けた上で、改めてその可能性と限界を探ることにある。

確かに、これまでも Buelow/Marx による New Mattheson Studies (1983年) や Hirschmann/Jahn による Johann Mattheson als Vermittler und Initiator (2010年) などの論文集、あるいは日本では礪山雅

氏による一連の研究など、マッテゾンを思想史的に捉える試みはなされてきており、報告者たちの発表もまた、そうした研究史に連なるものといえる。とはいえ、概して学術的な文献におけるマッテゾンの取り扱いには、マッテゾン自体を中心的な検討対象とするのではなく、他のトピックを論じる際に部分的に言及されるに留まることが多いこと、さらに少なくとも日本語圏においては、マッテゾン自体を多面的に検討する機会は今まではなかったことから、なお本シンポジウムの学術的意義は高い。

マッテゾンそれ自体に注目するときに浮かびあがるのは、その割り切れない性格である。ごく世俗的にみえるジャンル論・様式論を展開したかと思えば、音楽の持つ宗教的意義を延々と主張する。あるいは、一方では音楽の「革新者」として振る舞いつつ、他方では『完全なる楽長』(1739年)に現れるような「体系家」としての側面も持つ。こうした「割り切れなさ」は、しかしひとりマッテゾンにのみ帰されるものというよりは、18世紀という時代の持つ特性でもあろう。

そのうえでしかし、本シンポジウムは、そうした多面的ないし過渡的な性格を持つマッテゾンの音楽思想を、単に時代的兆候として割り切るのではなく、ときに現代的な視点をも取り入れつつ、あえてそれが持つ可能性および限界という観点から論じなおすことを試みるものである。マッテゾンをおのこのように思想史的な側面から検討することは、ひいては現代における「音楽との向き合い方」へと問いを差し戻す契機ともなると考えている。

今回、18世紀フランスの音楽思想をご専門とされる小穴晶子氏にコメンテーターをお願いしたことも、こうした意図に基づいている。本シンポジウムを通じて、18世紀ドイツという文脈じたいも相対化するこ

とができれば、報告者たちにとって望外の喜びである。

【発表概要】

村上曜：マッテゾンに連なる思想的系譜

マッテゾンは数学的音楽の伝統に反対して多くの教会音楽家と論争し、感性主義を掲げてギャラントな趣味を唱道したため、とかくその言論の革新性が注目を集めやすい。しかし、時代の端境期に立つ言論人の例に漏れず、マッテゾンもまた旧時代の思想的伝統を十分に自家薬籠中のものとした上で新しい方向性を主張していたのであり、論の端々に17世紀以前の思想的残滓を認めることができるのである。本発表では、そうしたマッテゾンに連なるマッテゾン以前の思想的バックボーンを概観し、併せて特にマッテゾンの調性格論に関する発表者の最近の研究成果を紹介する。

米良ゆき：マッテゾンの「感覚主義」について

マッテゾンはピュタゴラス学派を端緒とする数学的音楽観を拒絶し、「感覚主義」と呼ばれる立場をとった。本報告では、この「感覚主義」に関する思想を俯瞰的に整理しながら、音楽を「聴く」という行為の可能性と限界について、マッテゾンが如何に考えていたのかを論じたい。彼はイギリス経験論に傾倒したほか、フランス王立科学アカデミーの学者たちによる音響学的研究への目配りを欠かさなかったが、その一方で形や重さを持たない「音 (Ton)」の本質を神秘に満ちた「霊的なもの (spirituelles)」と表現した。一見すれば矛盾するこの態度は、マッテゾンが「音」という素材の非物質性に着目した上で、認識能力の及ぶ範囲を見極めようとしていたことを意味している。現代に生きる私たちにとってもまた、聴覚芸術の捉え難さは往々にしてそれを語ることを阻む。本報告ではマッテゾンという事例を通して、音楽を「聴く」という不確かな行為のもつ意味を提示したい。

岡野宏：マッテゾンの修辭的音楽観とその可能性

本発表が注目するのは作曲技法としての音楽修辭学ではなく、芸術制作理念としての「修辭」である。マッテゾンが音楽作品の様式選択に当たり、教会・劇場・室内などの「場」を重視したことはよく知られる

が、それらは単に伝統的な様式区分を引き継いだものというよりは、ある種の社会認識と相関していた。即ち、音楽はそれが提示される共同体のあり方と結びついていたのである。本発表は、こうした「受け手」というファクターを考慮する理念として「修辭」を位置づけるものである。こうした機会主義的な芸術観は19世紀にあつては、啓蒙的な普遍主義とロマン的な相対主義によって消尽を余儀なくされる。しかし、モダニズムの自律美学が失調し、大なり小なり「誰が、いつ、どこで聞くのか」ということに自覚的たらざるを得なくなっている現代においては、こうした修辭的音楽観は改めて参照される意義があるだろう。

【傍聴記】(近松博郎)

今回の研究会では、おもに 18 世紀前半のドイツで音楽家・理論家・著述家として広範な活動を展開したマッテゾンについて、シンポジウム形式により多角的な考察が試みられた。

最初にプランナーの岡野氏により開催趣旨が説明され、マッテゾンの音楽思想を思想史的観点から新たに検討するという主題が述べられた。特にマッテゾンの「多面的・過渡的」性格(ただしこれは岡野氏自身に認められたように 18 世紀全般に関わる問題といえよう)に焦点を当てること、そしてマッテゾンの思想とテキストを相対化するため「ドイツ」という文脈の相対化を試みることが目的として付言された。

村上氏の発表では、まずマッテゾンの略歴と音楽関連著作、そして彼の思想的立場に関する基本情報を概観した後、彼が敵視していた前時代的思想(四科的・魔術的)にマッテゾン自身非常に通じており、バルトルスの音性格論からマッテゾンの調性格論が影響を受けていた可能性が提起された。筆者は、マッテゾンが教理的音楽理論家を敵視し、伝統的教会音楽を攻撃した一方、生涯を通じてルター派の信仰に根差していた「宗教的人物」であったという村上氏の観点到に興味を持ったが、こうした観点もまたマッテゾン思想の多面性と過渡性を物語るものと理解した。

米良氏は、マッテゾンの感覚主義をイギリスの経験論(特にロック)、フランスの懐疑主義、フランス王立アカデミーによる科学的実験報告の 3 つから影響を受けたものとし、数学/数によって象徴される抽象的思弁性と体系化された学問的知識を重んじる理性主義との対立関係において説明しようとしてきた従来の論考では捉えられない彼の感覚主義の可能性を提起した。すなわち、神的・霊的なものである音を受容する感覚を含むマッテゾンの感覚主義は魂の属性として「知覚できないもの」「無限のもの」を範疇に入れる必要があり、思弁性に対抗するという意味での経験論的感覚主義では捉えられないと論じた。緻密な発表であったが、音と音楽をマッテゾンがどう区別しているかについても一言説明が望まれた。

岡野氏は様式論に代表される形で古代ギリシアから続いてきた「修辭的音楽観」(岡野氏によれば「あ

る音楽を制作・実践するにあたり、それがなされるシチュエーションを考慮に入れなくてはならないという理念)が有効性を持ちえた最後の時代である 18 世紀において、それが持ちえた意義についてマッテゾンを通して考察した。まず、マッテゾンによる教会・劇場・室内の三様式の区分を検討し、それぞれが社会的機能としての「場」(宗教的・世俗的・家庭的)を想定していると指摘した。次にそれらの「場」は、ある共同体のイメージを背景としており、その中で音楽は何らかの役割を持つものと考えられていることを示した。そして状況依存的性格を持つ修辭的音楽観が 19 世紀に存在意義を失うことを示し、なおそれが持つ可能性、すなわち一元的な普遍的理念や相対主義に陥ることなく一定の主体性を保ちながら共同体に参与・介入する可能性を提起された。現代におけるさらに具体的な提言へと今後結びつけられることが期待される。

コメンテーターの小穴氏はフランスの状況との比較で問題点の相対化を試み、ルイ 14 世のもと 1669 年に王権によってオペラ劇場が創設されたわずか 9 年後、マッテゾンの活動地ハンブルクに市民によるオペラ劇場が建てられたことの得意性を指摘した。王権のような確固たる基盤を持たなかったハンブルク・オペラは敬虔主義者らの批判も招いたが、これに対しオペラは非宗教的ではないと主張する立場からマッテゾンの宗教的態度が生まれたのではないかという推論が示された。また彼の理論で感覚が普遍性ではなく神秘と結びつく特異性、三様式の室内に「家庭」が出てくる点に伝統的な市民社会の反映がみられることが指摘された。

質疑応答は活発で、マッテゾンに対してカトリックではなくプロテスタントからも世俗的であるという批判があったか、また彼にとっての「魂」の意味・用法について黒木氏より質問があった。堀氏は、経験主義的用法と異なるようにみえるマッテゾンにとっての「無限」の意味に関して、また多岐にわたるマッテゾンの著述活動の中で、時代的変遷・変説が見られるか、そしてアリストテレスを踏まえた本格的フィグール論がマッテゾンに見出せるのか質問された。上尾氏は感覚・感情論のマッテゾンなりの源泉について問わ

れた。最後にゴチェフスキー氏はマッテゾン翻訳の際の問題として多義的な用語の訳の問題を指摘された。

18 世紀のドイツ音楽を知る上で決して避けて通れないものの、そのテキストの難解さと膨大さゆえに腰を据えて取り組む研究者が現れにくかったマッテゾンに本格的に向き合おうとする若手グループが出てきたのは僥倖である。村上氏によれば、約 20 冊の音楽著作を順次翻訳したいとのことで、これは大変な作業となろうが諸手を挙げて歓迎したい。氏が新刊訳書※の序文でマッテゾンの言葉を踏まえて書いている通り、「後から修正する仕事は最初に手をつける仕事に比べればずっと楽なのであるから」。

※ヨハン・マッテゾン『新しく開かれたオーケストラ (1713 年) : 全訳と解説』村上曜編著・訳、東京：道
和書院、2022 年。

日本音楽学会東日本支部通信 第 78 号

2023 年 1 月 19 日発行

発行：日本音楽学会東日本支部

<http://www.musicology-japan.org/east/>

日本音楽学会東日本支部事務局

〒102-0072

東京都千代田区飯田橋 3 丁目 3 番地 3 号生光ビル 303

TEL&FAX : 03-3288-5616

E-Mail : higashi@musicology-japan.org